

春の日

小川未明

もう、春です。仲のいい三人は、いっしょに遊んでいました。

徳ちゃんは、なかなかのひょうきんもので、両方の親指を口の中に入れ、二本の薬指で、あかんべいをして、ひよっとこの面をしたり、はんにやの似顔をして見せて、よく人を笑わせました。とし子さんは、おこりんぼでちよっとしたことでも、すぐにいぼをつってしまいます。そうすると武ちゃんと、徳ちゃんは、つまらなくなります。二人が、いろいろに機嫌をとつても、とし子さんは、笑いもしなければ、ものもいけません。

そんなときです、徳ちゃんは、いつもする得意の、指を口に入れて、あかんべいをして、とし子さんの顔をのぞきます。さすがに、いぼつりのとし子さんも、これを見ると、くすくすと笑い出して、じきに機嫌を直すのが例でありました。

武ちゃんには、徳ちゃんのように、そんなひょうきんのまねはできませんでしたから、もし、とし子さんと二人のときに、どうかして、とし子さんが、いぼをつれば、

「としこさんのばかやい。」といって、悪口をいうか、なぐりつけるのが関の山で、とし子さんも、「だれが遊ぶもんか。」と、いって、泣きながら、帰ってしまいます。

しかし、三人は、いつとはなしに仲は直りますが、もし、徳ちゃんがいなかったら、そう容易に打ち解ける糸口が見つからなかったかもしれません。

ある日のことでした。三人は、いっしょに、お濠（ほり）の方へ歩いてゆきました。雪が消えて、水がなみなみと、午後の日の光に輝やいていました。土橋（どばし）のところへは、よく、あめ屋や、おもちや店が出ています。

この日は、珍しく、紙芝居のおじさんがきていました。

「紙芝居だね。」

「おもしろいな。」

そんなことをいい合つて、おじいさんの方へ走ってゆきました。

おじいさんは、五、六人の子供を前に集めて、お話をしていました。

——王さまは、戦争からお帰りなされると、その美しいお后をおもらいになりました。三国一（さんごくいち）の美人ですけれど、まだお笑いになったことがありません。どうしたら、愛するお后が笑ってくれるだろうか？ 王さまは、山と宝物をお后の前に積まれました。けれど、やはりお笑いにはなりませんでした。

御殿のお庭に、鐘がつるされていました。

「この鐘を、なんになさるのでございますか。」と、お后が、王さまにお問いになりました。

「この鐘は、私が、忠勇（ちゅうゆう）の兵士をここへ呼び集めるときに、鳴らす鐘だ。これを鳴らせば、たちどころに、城下に住む三万の兵士たちは、ここへ集まってくるのじゃ。」

「どうか、この鐘を鳴らしてみせてはくさいませんか。」

「ばかなことをいうものでない。ほかの願いならなんなりときいてやるが、この鐘は大事があつたときのほかは、鳴らされないのだ。」

「これほど、お願いしても、おききくださらなければ……。」

王さまは、愛するお后の機嫌を損じたと思し召されて、家来に命じて、鐘をお鳴らしになりました。

すると、「すわ、大事だ!」と、いって、三万の兵士は、取るものもとりにあえず、軍（いくさ）の仕度をして、御殿のまわりに集まりました。

これをごらんになった、お后は、はじめて、からからとお笑いなさいました。何事もなかったとわかると、兵士たちは、そのまま帰ってしまいました。

お后は、鐘を鳴らしただけで、あの先を争って集まった兵士たちのようすを、もう一度見たいと思われました。

「もう一度あの鐘を鳴らしてみせてください。」

王さまは、美しいお后の笑いをごらんになりたいばかりに、また鐘をお鳴らしなさいました。鐘の音をきくと、兵士たちは、取るものもとりにあえず、軍（いくさ）の装束に身をかためて、前と同じように、御殿のまわりに集まってまいりました。これをごらんになったお后は、おもしろがって、からからと、ころげるばかりに、お笑いなさいました。

それから、幾月も間がなかったのであります。やぐらに登って見張りをしていた家来が、あわてて降りてきて、

「たいへんです、夷（えびす）の軍勢が、押し寄せてまいりました。」と、王さまに、お告げしました。

王さまは、驚きなされて、さっそく、鐘をお鳴らせになりました。しかし、二度も、だまされた人たちは、またかといって、だれもくるものがありませんでした。それがために王さまとお后は、ついに夷（えびす）の軍勢のために、浮虜（とりこ）となってしまいました。――

おじいさんのお話は、終わりました。

三郎は、肩をならべて、お家の方へ帰りました。

「昔、支那にあった、ほんとうの話だつてね。」と、武ちゃんが、いいました。

「ばかな、王さまだなあ。」と、徳ちゃんが、考え深そうに、いまの話を思い出しながらいいました。

「私、あんな后きらいよ。」と、とし子さんが、恥ずかしそうにしていいました。

あちらには、春の黄昏方（たそがれがた）の空が、うす紅く、美しい、夢のように見られたのであります。

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと鳥」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「教育・国語教育」

1936（昭和11）年3月